

付録：『歌の祭り』抜粋

「蝶の雑記帳 140」

最近、この「蝶の雑記帳」は手に取ることでできた書物を題材にすることが多い。ところが、老年の深まりがおもな原因で関心をよせる書物を選び出すことがほとんどできていない。今年の異例に長い酷暑のせいで書物を読むこともままならなかったが、目にとまったル・クレジオ著『歌の祭り』をなんとか読み通したので、それを採り上げる。ただし今回は、中身があるとも言えないようなごく短い文になる。

それは、わたしがノーベル文学賞を受賞したクレジオの思想を十分受け取れなかったからである。アメリカ大陸で暮らして、クレジオは、その大陸の諸先住民族の宗教・神話・祭り・民俗などを識った。北と南のアメリカ大陸に存在した根源的な生き方と思想についての学習は、彼の世界観を変えるほど真剣なものだった。彼が獲得して『歌の祭り』で語られる世界観は尊重すべきものだと思う。この作家の文章は読む者を動かす力をもっている。

しかし、心性の違いによるのだろう、わたしはクレジオの説くのと異なる世界観をもっている。そのせいで、『歌の祭り』が称賛する全部に共感することができない。文学が思想に占める重要さは大きなものだと思う。現代社会に対する鋭い批判にも賛同できる。けれどもわたしは、世界観は自然科学が明らかにする自然についての知見によって修正されるべきものだ、と考える。だから、世界についての神話的な受けとめ方に賛成できない。

そういうわけで、クレジオの言葉で大事だと考えて線を引いた文章を挙げて内容に踏み込んだ思索をする気力が湧かなかった。

しかし、クレジオの引用した先住民の文章に、思想としてほんとうに大事なものがあると思うので、一つの文章をここに孫引きして示し記憶にとどめることにする。1855年、先住民の土地を買い上げようというアメリカ合州国政府の申し出に対して、諸部族連合会議でルンミ族の長シアトル^{おさ}が演説した回答文だという。

わたしが感動したのはほとんど全文だが、少し短縮して抜き出し、詩句のように並べて示そう。全文を知りたい人には、これを糸口にしてル・コレジオの著書を読まれることをお勧めする。クレジオの思想も知ることができるから。

われわれは、われわれの土地を買おうというあなた方の申し出を検討しよう。それを受けいれると決意するにしても、ひとつの条件がある。白人たちは、

この土地に住む動物たちを、みずからの兄弟として扱わなくてはならない。……

私は千頭ものバッファローが草原で朽ちてゆくのを見てきた。走る列車から撃った白人たちに、そのまま捨てられたものだ。……

われわれは、ただ生きるためにしかバッファローを殺さない。

動物たちなくして、人間とは何なのか。

すべての動物たちが消えてしまうなら、人間は心に非常なさびしさを感じ、それで死んでしまうだろう。

なぜなら動物たちに起こることは、やがては人間にも起こるのだから。すべては結ばれているのだ。

あなた方は子供たちに対して、

足の下の地面はわれわれの先祖の灰でできているのだということを教えなくてはならない。

子供たちが大地を敬うように、

それはわれわれの人々の生命により豊かになってるのだと教えてやりなさい。…

大地こそ母なのだ、と。

大地に対して起こるすべてのことは、大地の子たちにも起こる。

……

われわれは知っている。大地が人間のものなのではなく、人間こそ大地のものなのだ。

われわれは知っている。血がひとつの家族を結びつけているように、すべては結ばれているのだと。

すべての物事は結ばれている。

大地に起こることは大地の子らにも起こる。

生命の布を織ったのは人間ではなく、人間こそ布の一本

の糸でしかない。

われわれ戦士たちは恥を知ってきた。敗北のあと、のらくらとくらしている。…、われわれが日々の残りをどこで過ごすかがどうでもいい。もはや数も多くない。さらにわずかな時がたちいくつかの冬が過ぎれば、かつてこの土地に住んだ、あるいはいまも小さな集団となって森をさまよっている偉大な部族の子らは、誰も残らないだろう。かつてはあなた方とおなじほど強くおなじほど希望にあふれていた人々の墓に泣く者は、誰も残らないだろう。…

…おそらく、何があろうと、われわれは結局は兄弟なのだろう。いずれわかる。……

……そしていつか、最後の赤い人がこの大地から姿を消し、彼の思い出が大草原の上をすべる雲の影でしかなくなるときも、これらの川岸やこれらの森は、私の人々の魂をかくまってくれることだろう。かれらは生まれたばかりの赤ん坊が母親の心臓の鼓動を愛するように、この大地を愛しているのだから。だからわれわれがわれわれの土地をあなた方に売るとしたら、われわれがいつも愛してきたように土地を愛してください。われわれが世話をしてきたように土地の世話をしてください。

あなた方が手に入れた時のままの姿で、この国を記憶にとどめてほしい。そして全力で、すべての思考を使って、すべての思いをこめて、土地をあなた方の子らのために維持し、神があなた方全員を愛するように土地を愛して

ほしい。

われわれは、このことだけは知っている。われわれとあなた方の神は、おなじ神なのだ。神はこの大地を愛している。白い人も、人間に共通の運命をまぬがれることはできない。おそらくわれわれは兄弟なのだ。いまにわかる。

2025 年 10 月寒露

海蝶 谷川修

